



巻頭言—複眼的な視座で考える習慣を!—

社会で生じているさまざまな出来事に関して、人それぞれにいろいろな受け止め方をし、自分なりの意見があったりするわけですが、今日の社会では、そうした個々人の意見に影響を与える社会的な次元での見解が、いっそう多様化してきています。多様化というよりは、むしろ考え方の型や枠組みが、崩れてきているといってもいいのかもしれませんが。

たとえば、かつては政治的な次元では、保守／革新というイデオロギー的な対立軸が明確だったので、現実の政治や政策に対して論評する立場もわかりやすく、自らの意見も整理しやすかったのですが、今日ではそうではありません。革新、あるいはリベラルといわれる勢力が、著しく衰退したためです。「なんでも反対」し「批判」するだけでは生産的ではありませんが、「おかしなことにはおかしい」と言い、「改善の方向を示す」ということは、やはり大切です。

2017年から昨年に問題になった森友・加計問題は、国有地の格安売却や獣医学部設置をめぐる経緯が不透明で、そこに総理大臣の関与が疑われ、国会での虚偽答弁や公文書の改ざんが問題になりました。また、昨年（2018年）に発覚した中央省庁の障害者雇用増し問題では、弁護士らの第三者委員会の調査の結果、3700人を不正に「障害者」として計上していたことが明らかになっています。そして今年に入って、厚生労働省の「毎月勤労統計調査」では、全数調査を行わずに抽出調査で対応し、全数調査を実施していたように処理していた問題が明らかになり、その後も「賃金構造基本統計」などでも不正が指摘されました。総務省は2月1日に「小売物価統計」でも調査方法の不正があったとして、政策立案などに使われる特に重要なデータとなる56ある「基幹統計」のうち24の基幹統計でなんらかの問題があり、統計法違反に該当する可能性がある間違いも21統計あったとしています。

こうした問題は、単なる不正や不適切という域を超えています。なぜなら政策立案や政策の遂行に直接的にかかわる「情報」を適切に収集していなかったり、データを改ざんしていたり、不正を隠蔽していたりというように、民主主義が適切に機能するための前提条件を掘り崩す事態だからです。だから、決して看過することができない問題なのです。

しかし、野党の批判の仕方やマスコミでの取り上げ方にイ



おかば学園 壁面

ンパクトはなく、この間の最大のニュースが「嵐の活動休止」だというのは、ほんとうに由々しき事態だといえます。

では、どうすればいいのでしょうか？ 無理に政治の話題に関心をもたなければならないというわけではありません。まずは、目の前の課題にしっかりと向き合うことが大切です。たとえば、支援においては「あるがまま」のその人をしっかりと受け止めるということが重視されます。しかし、他方で「自己実現」していくことを支援するという観点も重要になります。さて、この2つの観点はどのように折り合いをつけることができるのでしょうか。「あるがまま」ということは、そのままということです。「自己実現」というのは、そのままの状態より少しでも向上していこうというものです。ドイツの哲学者ニーチェも「人間は克服すべきなにかだ」と述べています。人が生きるということは簡単なことではないですね。

また、「その人の想いや意思を大切にすること」も支援においては大切な観点です。しかし、同時に「あたり前の生活の実現を」ということも支援においては重要な目標になります。たとえば、「いまの生活にその人は満足している。でも、この社会で、その人の年齢を考えると、いまの生活状況のままでいいのだろうか…?」。こうした葛藤は、支援の現場では常にあります。私たちは、どのような場合でも、特定の視座からしか物事を捉えることはできません。つまり、すべての観点を網羅した見解はあり得ないのです。だから、自らの視座を自覚的に問い直し、それとは異なる別の視座があることを理解し、話し合い、議論することが大切になります。このように複眼的な視座で考える習慣を身につけ、他者と話し合うことは、民主主義を育むことにもつながります。そんなところから取り組むことが大切なのだと思います。

KCDラボ代表 松端克文

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：「個別支援計画」について

個々の利用者の支援の計画は、児童福祉法や知的障害者福祉法に基づく措置制度の時代には、一般には「処遇計画」と称されていて、本人や家族に開示するというよりは、措置機関である行政向けの資料として作成されてきた。

しかし、2003年度からの支援費制度、2006年度からの障害者自立支援法、そして2013年度からの障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（障害者総合支援法）を通じて、個々の利用者ごとに指定特定相談支援事業者が「サービス等利用計画」を作成し、それぞれの事業所ごとに「個別支援計画」を作成し、本人および家族に提示し、同意を得て、契約のもとにサービスを利用するという仕組みが定着してきた。たしかに契約主体は利用者本人であり、利用者の希望やニーズに応じて支援していくという仕組みではあるのだが、形骸化しやすいという課題もある。対等な立場で話し合い、お互いに着地点を探っていくことで、計画書を作成するというような取り組みではないためである。

そもそも「利用者主体」という理念は大切だが、それがどれくらい実現するのかということは、支援者側の姿勢に依存しているのである。「利用者」が文字通り「主体」であるというよりは、そうであることを大切にしている支援者側の価値判断や支援内容の如何で、左右されてしまうという支援の非対称的な構造を自覚的・反省的に認識しておくことが重要である。

それだけに利用者の状態や利用者の置かれている状況をアセスメントし、それをもとに個別支援計画を作成し、計画の実施状況をモニタリングし、評価して、再度アセスメントして…という循環的な取り組みのもつ意味は大きい。

アセスメントは、その利用者はどのような人で、どのような生活を望んでいて、どのような長所や可能性があり、いまどのような状況に置かれていて、そのなかでどのような課題が生じて、どのようにしていけばいいのかといったことを、できるだけ多くの情報を収集しながら、把握しようと努めることである。だからアセスメント票のチェック項目に機械的に記入するというような作業であってはならない。

個別支援計画は、アセスメントの内容をふまえ、これからの支援の方向を定めたものである。しかし、西欧・キリスト教文化圏ではないので、ゴール（目標≒終末）から逆算して、いまを考えるとという習慣が、私たちには文化的にもあまり備わっていない。しかし、個別支援計画では支援の目標を中長期～短期というスパンで考え、その目標に向かって、いまなにをするのかという発想が必要となる。

どのような目標に向かって支援すべきなのか？ 本人が明確にことばで意思を示してくれればいいのだが、ことばで意思確認ができない場合には極めて難しくなる。しかし、ことばによる意思表示があったとしても、それがそのまま支援の目標になるわけではないので、「意思決定支援」をどのように考えるのかということは重要な課題でもある（vol.1 参照）。

結局、アセスメントから個別支援計画の作成を通じて、そ

の利用者にとってどうなることが、あるいはどうすることが、望ましいこと（「最善の利益」）になるのかということ、本人を中心に家族も含めて考えることになる。正解があるわけではないので、「とりあえず」「合意」できるところから始めるしかない（「とりあえずの合意」の重視）。だから支援者間でしっかりと話し合うこと、あるいは話し合えるような環境が極めて重要となる。

人生を舞台にたとえれば、人生とはあるシナリオのもとで、一人ひとりが役者として、それぞれの役を演じるということでもある。舞台では主人公がいるが、主人公だけで物語がつくれるわけではなく、脇役によりその物語の成否が決まるといっても過言ではない。しかも、スピンオフ・ドラマがあるように、だれにスポットを当てるかで、物語自体の見方も変わる。個別支援計画では、一人ひとりの利用者を主人公にして、その人の舞台としての人生がより輝いたものになるように、シナリオを考え（支援目標を定めて、具体的な支援計画を立て）、配役を調整し、舞台設定をする（環境をコーディネートする）ような作業でもある。

* その人がより輝くように、その人を中心として、ほかの利用者との関係やプログラムを考え、調整していく、こうした発想で、一人ひとりの利用者の支援をオーダーメイドでつくっていく。

* その利用者が課題の克服や達成に向けてなにか努力するというのではなく、その人がよりよい状態になるように（たとえばある課題の達成に向けて努力できるように）、支援者としてなにに、どのように、取り組むのかということ計画書として作成する。

* それは計画書のための計画書ではなく、少しでもよりよい支援を実現するための計画（書）となるように日々、実践していくことが必要となる。

こうした観点・考え方を支援者間で共有し、日々の実践の状況を「記録」（さらにはエピソード）として蓄積し、一定の期間（必要であればその都度、定期的であれば半年・1年）ごとに振り返り（モニタリング・評価）、次の支援につなげていくようなサイクルで支援ができれば、利用者がエンパワーメントし、生活の質が向上するだけでなく、エンパワーメントが連鎖し、支援者の専門性も向上していくといえる。

しかし、「教育は、教育者の意図を超えて、つねに展開する」といわれるように、支援においても同様に、支援者の意図を超えて、利用者の人生や生活は展開していくものである。支援の「意図せざる結果」は、よくも悪くも支援の醍醐味でもある。だからこそ、日々、支援者間で話し合うことがとても重要となる。「ちょっと気になったこと」などを支援者間で共有し、お互いに認識を改め、相互に愛容・成長していけるような専門職のチームであることが、個別支援計画の実効性を担保することになるといえる。 KCD ラボ代表 松端克文（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

* 毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

ザ・ワーカー ～支援の現場から～

今月のワーカーは、生活介護事業所のみに園の中島秀明さんです。

——まず、主な仕事内容について教えてください。

主な仕事内容は、更衣や排泄介助、食事介助などの日常生活支援と、作業や療育活動などの日中活動支援です。

日中活動は袋作業、箸入れ作業などの受注作業や、農園での農作物生産や紙すき製品などの自主製品製作作業、ウォーキングや専任講師による音楽療法・運動療法などの療育活動があります。自主製品の野菜やオットマン（牛乳パックを集めてつくった椅子）は、地域の集会所などで行っているふれあい喫茶や、北神急行谷上駅構内で販売しています。楽しみにしてくださっているお客さまもいて、私たちもそれが励みになっています。

療育活動のウォーキングは毎日出かけていて、参加される利用者の方々に楽しんでもらえるよう、歩くコースもバラエティ豊かに提供しています。私たち支援員は、活動によって係など役割分担はありますが、固定することなくすべての作業や療育にかかわり支援しています。

——なぜ、福祉の仕事に就こうと思われたのですか。

学生時代に、知り合いに誘われて参加したボランティアで、障害のある子どもとかかわる機会があったんですが、その経験をぜひ活かしたいと思ったからです。YMCAのボランティア活動のなかで、障害のある子どもに出会ったんですが、最初から全く抵抗はなく、とても楽しくかかわることができました。ですから、就職活動の時期には「障害のある方々とかかわる仕事がしてみたい」ということを考えて、いろいろな障害関係の就職先をさがして、みのたに園で働くことになりました。みのたに園で働き始めてすぐは、重い障害のある方への対応に、正直なところ最初は少し戸惑いましたが、学生のとときと同じで、やはり抵抗というのは全くなかったです。



中島 秀明（なかじま ひであき）
障害福祉サービス事業所 みのたに園
2010年4月 みのたに園入職

——いまの仕事のおもしろさ、楽しさはどういったところにありますか。

支援しているなかで、利用者それぞれの得意としている部分を見つけるところですね。みなさん一人ひとりが得意としていることが全然違うので、そこを見つけることがとてもおもしろいと感じています。たとえば、初めてかかわる人とも臆することなく話すことができる利用者の方については、「地域とのつながりづくりできっと力を発揮する」と思いますが、作業でも細かい部分ができるようになった利用者の方については、「もう少し練習すると、ひとりのできるようになる」と感じます。そういった、個々人の伸びしろを見つけることができたとき、自分自身もとても楽しくなります。

——しんどいところはないのですか？

そうですね…。みのたに園で働き始めたときはすべてが“楽しい”ばかりだったので、8年経っていくらか気持ちに変化はありますが、基本的にはやっぱり“楽しい”という思いがあります。なので、しんどいことはあまりないんですが…。利用者の方々はみなさん一人ひとり個性が違うので、作業に取り組むときなど個別な対応が必要な場面もあるんですが、支援員の人数の問題で1対1でのかかわりが難しい状況がある、ということがしんどいですかね。でも、人手があればなんでも即解決する、ということでもないので、支援員みんなで知恵を出し合って、いろいろと工夫しながらがんばっていきたいと思っています。

現在リーダーなんですが、先輩リーダーがいなかったこともあって、“あるべきリーダー像”のようなものがわからなくて悩んでいます。でも悩んでいても仕方がないので、いまは試行錯誤しながら、リーダーとしてシフトや業務内容の調整などにも取り組んでいます。しんどいと言えば、これが一番しんどいかもしれません(笑)。

——これから福祉の仕事をしたいと考えている人たちへ向けてメッセージをお願いします。

福祉の仕事は、ほとんどが対人の仕事だと思います。こういった人と接する仕事は特にそうだと思いますが、仕事をする上でいろいろな葛藤や苦勞を感じる場面がたくさんあるように思います。でも、そうした葛藤や苦勞を感じながらも、利用者の方々と日々かかわるなかで、“楽しい”と感じたり、新しい発見をしたりすることがあります。そういうことで、また自分自身の成長などを感じることができるようにも思います。興味がある方はぜひ挑戦してもらいたいですね。

——本当にそうですね。本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

気持ちのオン・オフをきちんと切り替えることが、仕事を続けることにおいて大切であると話してくれた中島さん。中島さん自身は切り替えがあまり上手ではないとのことでしたが、みのたに園での仕事を終えて帰宅されると、ひとりのパパとして、自然にオフの状態になるそうです。オンもオフも、“楽しい”という気持ちがベースという姿勢、ぜひ見習いたいです。(朝)

利用者さん直撃インタビュー！！ ～みのたに園 Factory たけふ編～

去る2月4日、陽気会本部から少し離れたところにある生活介護事業所みのたに園の「Factory たけふ」取材しました。Factory たけふでは、お菓子（クッキー、マドレーヌ、パイ、シフォンケーキなど）の製造販売、さをり織り製品の製造販売、喫茶、軽食、お弁当販売などの活動を行っています。今回の取材では、Factory たけふで接客をしている利用者さん3名にインタビューに応じていただきました。

*「たけふ」は囲碁用語で、「簡単には崩せないつながり」をあらわしています。

*みのたに園サービス管理責任者の樋谷さんも同席。

*写真の掲載についてはご本人の了解を得ています。

—お仕事はなにが楽しいですか？

（照れながら）お客さんにお水を運んだり、カレーや焼き飯を出したりすることが楽しいです。

—食べものや飲みものをお客さんに出すとき、こぼしそうになったりして、こわくないですか？

空いているテーブルに置いてから出すので、大丈夫です。

—なるほど！いままでにこぼしたことは…？

1回だけ…（笑）

—すごいですね。働き始めてから何年ぐらい経ちますか？

[樋谷さん]Aさんは去年の6月から来られて、Bさん、Cさんは開店当初からなので、7年ぐらいですね。

—Bさん、Cさんはベテランさんですね。みなさん、お客さまに「いらっしゃいませ」や「ありがとうございました」って言われるんですか？

はい、毎朝練習してます。

—朝、どんなふうに練習しているんですか？

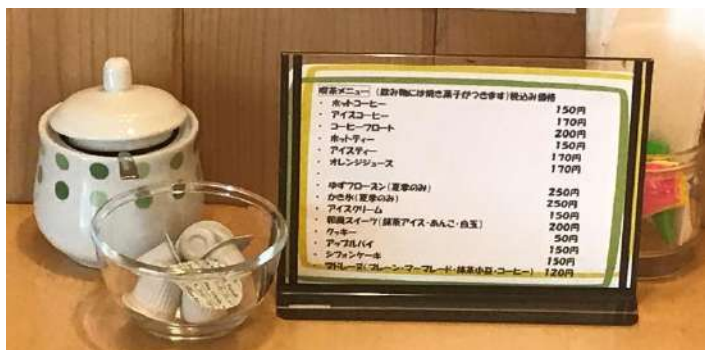
「いらっしゃいませ」「ご注文はお決まりでしょうか」「少々お待ちください」「お待たせしました」「ありがとうございました」

—さすが！お上手ですね。

[樋谷さん]朝礼があって、そのときに練習してるんです。

—お昼にはカレーとか焼き飯とかあるんですか？

そうです。これがメニューです。



—わー、たくさんありますね。ようき寮（陽気会の障害者支援施設）の利用者さんに「おいしいから1回行って見て」ってよく勧められるんですが…メニューのなかで1番好きなのはどれですか？おすすめは…？

う～ん、カレーにスープがついてるやつかな。それと、日替わりセットやったら、シフォンとかがついて、後からコーヒーが出てくるんです。ようき寮ついてるんです。

—そうなんですね、豪華でいいですね。では、いまから注文したいんですけど、いいですか？

はい。

—わ～、迷いますね…。シフォンケーキ、アップルパイ…。

おいしそう。あ、飲み物には焼き菓子つき♪これにしよう！

ご注文はお決まりでしょうか。



—はい、ホットコーヒーをお願いします。

（メモをとりながら）少々お待ちください。



お待たせしました。



どうぞ～。

—ありがとうございます。いただきます。これからどうぞお仕事がんばってくださいね＼(^o^)/

ハニカミながら、一生懸命インタビューに応え、生き生きと楽しそうに接客してくださった Factory たけふのみなさま。本日は癒しのひとときをありがとうございました。次回はプライベートでお邪魔させていただきたいです♪（真）

アセスメントと個別支援計画 ～説明会から～

2月7日ラボにて、法人の成人事業所のサービス管理責任者（サビ管）を対象に、アセスメントシートと個別支援計画書の新しいフォーマットについての説明会を行いました。説明会を通して、アセスメントと個別支援計画の必要性についても理解を深めました。

これまで、チェック項目が多すぎて煩雑になっていたアセスメントシートをこのたび見直し、重要な項目にしぼることでわかりやすく状況を把握し、計画につなげられるようフォーマットを変更しました。

アセスメントは、「できる」「できない」という状況把握の調査だけで終わるものではなく、「その人がどのような状況に置かれているのか」ということを把握することが大切です。そして状況把握の調査とともに、「どのような生活、人生を送っているのか/送りたいのか」「あたり前の生活とはどのようなものか」といった利用者の生活全体を捉えたニーズの調査を行い、その両側面で確認した結果から、ストレンクス視点をふまえた課題を抽出し、個別支援計画につなげていくものです。アセスメントで重要なことは、「では、どのように支援するか」ということをじっくりと考えていくことである、ということを変更して確認しました。

個別支援計画については、昨年9月から計画書のフォーマットを少し変えていましたが、今回のアセスメントシート変更に伴い、さらに計画書がより効率的・効果的に作成しやすくなるよう変更を行いました。

計画書の「課題」というと、「達成されなければならない」とか「すべきこと」といったニュアンスが感じられるため、そうした義務的なニュアンスをなくし、利用者が具体的に取り組むことを明確にし、そのために支援者側はどのように支援するのか、ということであらわした計画書になるようフォーマットを整えました。計画の内容も、単なる理想的なことではなく、利用者一人ひとりの実態を見据えたものが必要で、それぞれの実生活や支援の実効性を無視したものにならないよう留意して考える必要があることを確認しました。



- ①モニタリングする際は、利用者が取り組んだことを評価するのか、支援者側を評価するのか？
⇒まずは支援者側がきちんと支援できたかどうかを評価する。その結果、利用者はどのように変わったか（または変わらなかったか）を確認する。
- ②モニタリングのために、日々の支援記録はどこまで必要か？
⇒毎日、支援を行った内容のケース記録が必要。
- ③支援したことで、こちらが意図する結果以外の結果になることがある。長い時間経過後に気づくことについて、日々記録に残していくことはむずかしい。
⇒時間経過とともに明らかになってきた事柄については、日々の記録のほかに、利用者のエピソードをストーリー（＝物語）として、残しておいてはどうか。サビ管の目線で見えて解釈されるエピソードは、そのサビ管にしか語りすることができない利用者の物語になる。

続いて、サビ管からアセスメントや個別支援計画に関しての質問や、日頃考えていることなどを伺いました。その後、意見交換をし、「記録が重要であることは承知しているが、一人ひとりの利用者について、計画に基づいて支援を行い、それについて毎日記録を残すのは、非常に困難である」、「支援員間で、支援に関しての意思疎通が図れていないときがある」、「支援する利用者の人数が多いことと、支援者が場面によって変わることで、計画の内容が覚えきれない」など、多くの支援員が実感しているだろう意見が出ました。また、せっかく本人の希望をふまえた『余暇活動の充実』へ向けての支援で、「必要なものを購入する際に使えるお金に厳しい制限がある」といった悩みもありました。法人内外に広く呼びかけ、不要になった物品を譲渡してもらえるような仕組みなどを検討し、工夫してみてもどうかという話もありましたが、こうしたことも含めて、よりいっそう事業所間で情報交換を行い、その結果を共有することが必要であると感じました。

今回は、入所支援施設や通所の生活介護事業所、就労継続支援B型事業所、共同生活援助事業所などのサビ管が集まりました。フォーマットの見直しということで、それについての説明が中心になりましたが、それぞれの事業所の状況や記録のとり方、アセスメントや個別支援計画に対する思いなど、ざっくばらんな意見が出され、なごやかで有意義な情報交換の時間になったように思います。

新しいフォーマット自体は、次年度分からの使用になり、問題なくスムーズに活用できるかどうかはまだわかりませんが、これからも様子を見ながら、必要に応じてみなさまの意見を伺いつつ、議論を重ねていければと思います。そして新しいフォーマットを通して、アセスメントや個別支援計画が、利用者の支援を行っていく上で、支援者側にとっても、『なくてはならないもの』になるよう、今後もみなさまと話し合いを続けていきたいと思っています。（朝）

ちょっといいですか？大西ですけど…

－親の思いを理解するということ－

◆親亡き後の問題

最近、この業界では、「高齢化」に関する講演会や研修会が頻繁に行われています。世間全般が少子高齢化の時代を迎えている現状と同様、障害者福祉の分野にも高齢化の波が押し寄せてきました。

高齢化の問題は、親亡き後の問題と直結しています。親亡き後の不安については、以前からよく耳にしてきました。障害のある子をもつ親は、我が子がいくつになっても「愛情」をもっていると思います。もちろん障害のない子をもつ親も同じですが、その愛情の大きさや、愛情を注ぐ期間が前者の方が大きく勝っているのではないのでしょうか。と同時に、潜在的に「責任」を感じていることも否定できないのではないかと思います。よく言われる「子離れ」が難しいのも、この2つの感情と無関係ではないような気がします。

で、この愛情と責任の一方で、身体的な負担感や精神的な負担感を感じながら生活しています。福祉サービスは、この負担感を軽減するために存在しています。さらにこのバランスの状態によって、利用すべきサービスの内容は決まってきます。アセスメントとはこのバランスの状態を明確にすることなのかもしれません。

◆高齢化問題解決の糸口

親亡き後の不安を解消するためには、親に代わってこの愛情と責任を注いでくれる者の存在が必要となってきます。しかし、そのような者はなかなか見つからないのが現状です。で、その次の対策として、個人ではなく施設という人の集団が必要となってきます。しかし、ここにもまたハードルがあって、施設に入所させることに罪悪感をもつ親が多いことも事実です。

この罪悪感の原因は、施設がきれいとかきたないとか、職員の質がどうこうとかには関係なく、親としての責任を放棄することになるのでは…と感じてしまうところにあるのではないかと思います。この放棄感を少しでも軽減するために、施設や職員はいい質を保ち続け、安心感を提供し続けることが必要になってきます。施設や職員の質が悪いと、親に対し不安感に加え、二重の罪悪感を与えることになってしまいます。

少しでも安心して生活していただけるような工夫をし、そのために努力していくところに、親亡き後と高齢化問題の解決への糸口をみつけることができるのだと思います。(大)



陽気会は創立 60 周年を迎えます

陽気会は、知的障害児施設おかば学園を開所してから 2018 年 9 月 1 日で 60 周年を迎えます。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、

陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、みなさまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

* 詳細は下記までお問い合わせください

編集委員会：松端 克文(KCD ラボ代表)
朝日 満子(KCD ラボマネージャー)
松端 真美(KCD ラボスタッフ)
大西 博之(法人本部長)

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078 (981) 7271

Fax : 078 (981) 0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email : kcclab@youkikai.or.jp

